

「ゼッケル文庫」に見る 16 世紀の金属活字版印刷術の様相

——装飾大文字の変遷と進化——

只野 俊裕

はじめに

「ゼッケル文庫」は東北大学附属図書館が所蔵する特殊文庫の一つです。これは、ベルリン大学教授エミール・ゼッケル (Emil Seckel, 1864-1924) の遺文庫で、昭和3年(1928)に受け入れられた総数7,380冊の外国人文庫です。その中に1600年以前に刊行された書籍が78点145冊あり、貴重書庫に別置されています。16世紀は、金属活字版印刷術(以下、活版印刷)が完成期を迎える時期であり、その実資料として貴重な書物群であるといえます。印刷の視点からどのような様相が見えてくるかを紹介することが小論の第一の目的です。

当時の活版印刷は、写本と同じ見栄えのものを作り、より安く大量に売って、利益を得るための技術でした。しかし、単なる金儲けの技術だけではなく、当時の写本に見劣りしない質を伴った書籍が求められました。

活版印刷は、写本の模倣から印刷本のオリジナルへと成長を遂げていきます。その変遷の跡をゼッケル文庫に見出してみたい期待もあります。

活版印刷の最初期(1455頃-1500)の本はインキュナブラ(incunabula=揺籃期本)と呼称され稀覯本として取り扱われ、古書市場では高値で取引されています。ちなみに活版印刷の嚆矢となったグーテンベルク聖書を1996年に慶應義塾大学が購入した当時は8億円で取引されたそうです¹。ただし、残念なことにゼッケル文庫にインキュナブラは1冊もありません。そこで一番古い本を探したところ1502年に作られた本を見つけました(資料1)。この本はポスト・インキュナブラとして、16世紀本の出発点にある本と位置付けることもできます。ここからゼッケル文庫の世界に入ることになります。

1. 活版印刷の見どころ

その前に、書物の製作工程について確認しておきます。活版印刷は4つの工程で成り立っています。日常、私たちが判子を押すときのことを思い浮かべてください。判子(版)に朱肉(インキ)を付けて、紙に、押しします(印刷)。つまり、版を作り、それにインキを付けて、紙に、印刷する、これで印刷が完成します。この印刷された紙を製本すると本になります。それぞれの項目が現在では一つの産業を成り立たせています。専門性が高く奥の深い分野であることが分かります。印刷業(組版+製版+印刷)、インキ製造業、印刷機械製造業、製紙業、製本加工業、などがそれです。

印刷の最初の作業は組版です。一粒ひとつぶの活字を組み合わせてゆくことで版が形成されます。実はこの前に一工程有ります。活字そのものを作る工程です。活字鑄造といいます。ところがさらにもうひとつ前工程があります。文字そのものの姿かたちをデザインする、書体設計です。本を開くとこのような工程を経て組版されたページが最初に目に飛び込んできます。一般読者はすぐに文字を読み始めて作品世界の中に入り込んでいきますが、ここでは物としての本、形としての文字を見ることが主題となります。

2. 活字書体の変遷と進化

活字書体は主に二種の機能を持ちます。読者の注意

を引く見出し書体と、文章を読ませるための本文書体

です。優秀な書体は販路を通じて正式に売買され、あるいはコピーされて拡散します。さらに時代を超えて改刻される書体もあります。活版印刷の初期は、ゴシック体とローマン体が主に使用され、それぞれに書体デザインが展開します。ゼッケル文庫の書籍も多種類の書体が用いられており、現代では本文書体としてはほとんど用いられなくなったゴシック体、イタリアの人文主義者たちによって再評価されたカロリングミナス

キュール (Carolingian minuscule) が洗練された形になったローマン体、アルド・マヌーツィオによって考案され後進によっても展開された流麗なイタリック体などが目に飛び込んできます。現在、本文組版書体の主流となっているローマン体やイタリック体の変遷に興味は惹かれますが、ここでは特に特徴的であると思われる装飾見出し書体の変遷と進化を辿ることにします。

3. 資料1：Roffredus. Saffinae quaest. 1502 (ゼッケル VI, D 2-4 105)

この本には、見出し大文字が2種類使われています。ゴシック体そのものの大文字と装飾大文字です。ここで対象とするのは装飾大文字です。それでは本書で検討する大文字の一覧を掲げましょう (図1)。本資料で注目した大文字は、写本に見られる彩色大文字に似ており、写本の書写体の歴史を調べてみると、ロンバルディック・キャピタル (Lombardic capitals) に相当する書体であることが分かります。この文字の系列はインクナブラの時代においても、グーテンベルクの『42行聖書』(1455)、フストとシェッフアー印刷工房の『マインツ詩編』(1457)、『ベネディクト詩編』(1459)、

シェッフアーの『教皇グレゴリウス9世の教令』(1473)などにも見ることができます²。

「ロンバルディック・キャピタルはしばしばヴァーサルに活用された。物語や鳥獣のモチーフで満たすなり、色彩の洪水と化すなり、とにかくヴァーサルの完成度というものは、ひとえに写字性と絵師の想像力に委ねられる。(中略)ロンバルディック・キャピタルは、テキスタイルや彫金、ガラス、陶芸など、工芸の世界にも広く受け入れられてゆく。他の書体には無いユニークな一面である」³。

ロンバルディック・キャピタルは、11世紀ころから、



図1 書体比較一覧

ヒューマニストキャピタルが出現する16世紀ころまで使用されました(図2)。本資料の装飾大文字は、このような手書き文字の系列から、活字に起こしたと考えることができます。現代では書体作家たちが意を凝らした様々な書体を提供していますが、当時の書体をデザインする職人の中にも、写本に見た彩色装飾大文字を、単色の活字に雰囲気を書し取ろうと苦闘し、このような文字の形を作ったのでしょうか。過剰な装飾のために判読困難な文字も見受けられます。

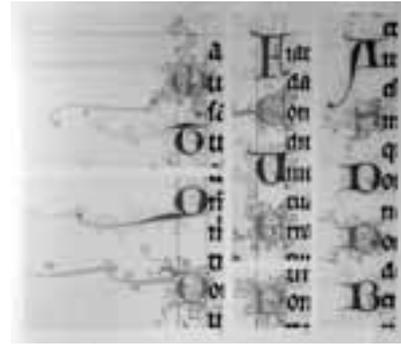


図2 ロンバルディック・キャピタルを使用した彩色装飾大文字
出典：『西洋書体の歴史—古典時代からルネサンスへ—』(スタン・ナイト 高宮利行訳 慶応義塾大学出版会 2001)

4. 資料2：Rembolt, B. *Vocabularius utriusque iuris*. Par.1514 (ゼッケル VI, D 2-1 63)

次に、資料1から10年余り後にパリで刊行された書物を取り上げます。本書の見出し書体にはオランダ・ゴシック体が使われています。それは1470年代にオランダの活字鋳造所で製作された活字書体で、パリなどをはじめヨーロッパの多くの印刷所で使用されました(図1の③)。この姿は書写体としてのロンバルド体に似て

いますし、資料1の装飾大文字にも似ています。書写体に触発されて、または活字書体に触発されて新たな書体が創作される様子が見取れます。ここに掲げたオランダ・ゴシック体の姿は洗練されており、1768年のエンスヘデ活字鋳造所の書体見本に見ることができます⁴(図3)。その説明書きには次のようにあります。

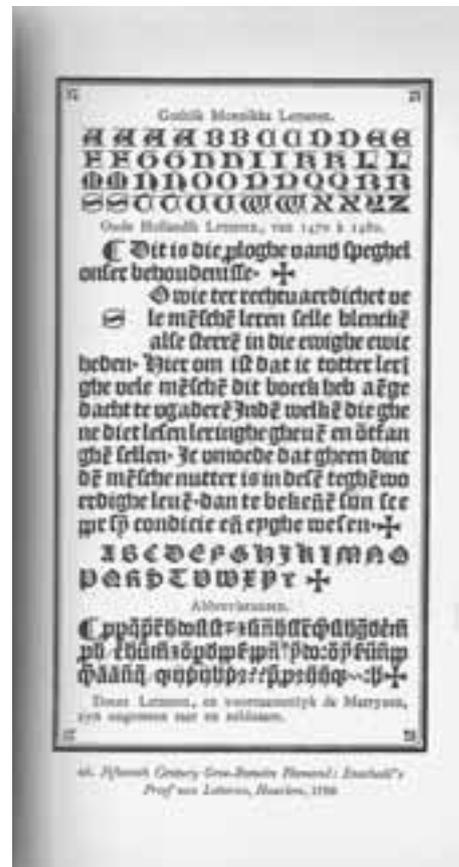
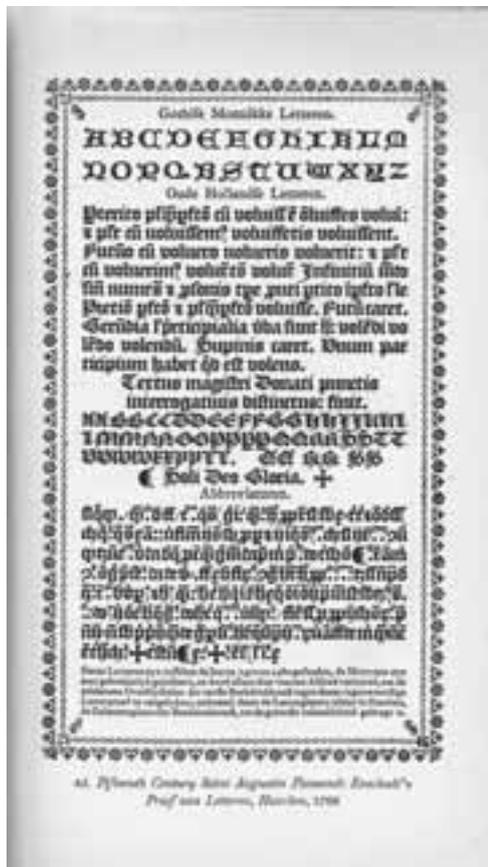


図3 オランダ・ゴシック体が掲載された書体見本帳
出典：Updike, Daniel Berkeley, *Printing types, their history, forms, and use; a study in survivals*

「Fig45 (図3左) これらは、有名なオランダの活字鋳造所エンスヘデにおいて、1768年に発行された活字見本帳に見ることができる、大変興味深いオランダ・ゴシック文字である。およそ15世紀後期頃—1470年と1480年の間に父型彫刻されたものと思われる。サン・オーギュスタン・フラマン（という活字形）の一種である。」

「Fig46 (図3右) それは、オランダの印刷者にして活字彫刻師であったデルフトのヘリンクという人物によって作られたものと思われる。彼は作品の奥付に「レタースナイダー」と自称する。これは書体彫刻師の意である。そしてそれらはいくつかの印刷者に提供され

た活字である。パリの印刷所で使用されているこの書体の記録がある。刻字において、ほぼ同じ書体（gros-romain サイズの）を1768年刊のエンスヘデ活字鋳造所の活字見本帳の巻末でも見ることができる。」

要するに、オランダ・ゴシック体はインキュナブラの時代に普及した書体で、パリで盛んに使われたことが記されています。本書はパリのレンボルト印刷工房で印刷された、とありますから、この記述内容に符合します。この本は1470年ころから半世紀ほど後の書物ですが、同じ書体が少なくとも数十年のあいだ、継続して使用されていたことがわかります。

おわりに

本論で取り上げた二つの書体は先行する書写体の影響を受けながらも活字独自の姿を表し、見出し書体としての役目を果たしました。このように書体は、書写体から活字体へ、活字体から活字体へと継承されたことが分かります。

ところで、ゼッケル文庫を俯瞰して感動することは、物量としての金属活字の迫力です（図4）。手漉き紙に

印圧鮮やかに印刷された様はそれだけで当時の新技術の勢いと矜持を伝えてきます。主な書体としてゴシック体とローマン体が使用されていますので、その概略を記しておきます。カール大帝によるカロリング・ルネサンス期に、カロリング小文字体（カロリング・ミナスキュール）がヨーロッパにおける書写体の標準として発達しました。この施策は800年ころ、アルクイ

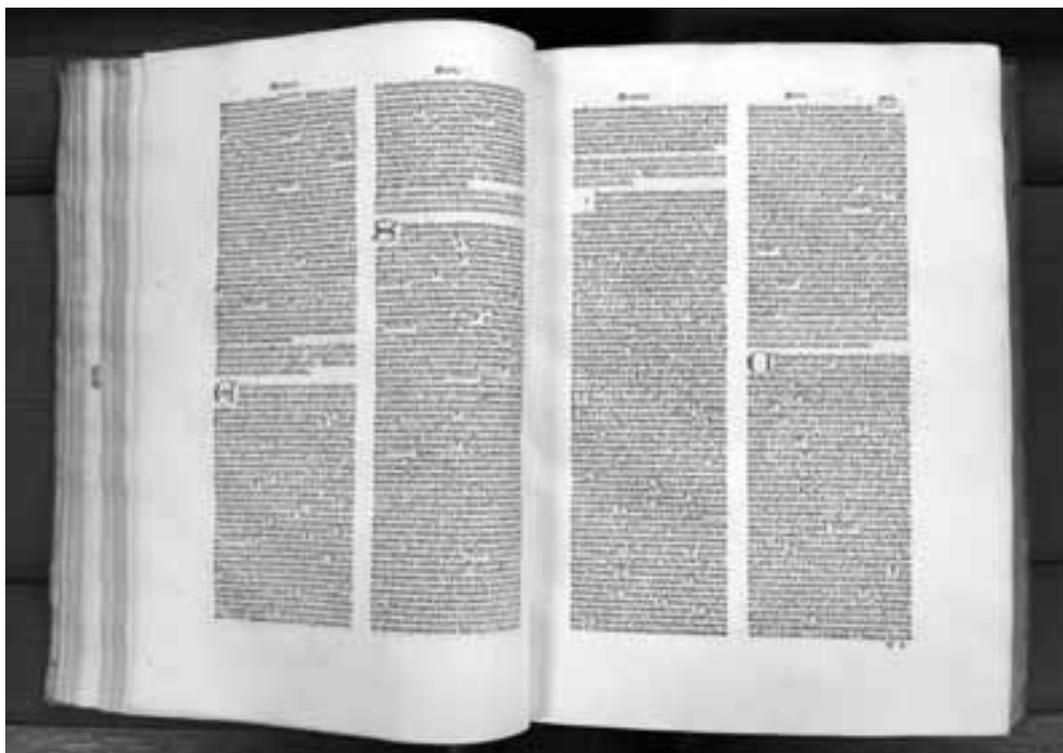


図4 資料1の見開き頁の様子（墨と朱の2色刷）

ンによって進められました。この書体はゴシック体に発展します。ゴシック体は、さらに数種の書体が考案され写本の主な書体として発展します。その中のテキストツール体が、グーテンベルクの聖書の書体として活字化されました。ローマン体はゴシック体が隆盛する陰になっていましたが、イタリア・ルネサンスにおいて学者や文人たちが好んでこの書体を使用することによって、近代の書体の基本になりました。活版印刷においては、マインツ騒乱(1462)の後、パナルツ、スベンハイムなどによって活版印刷がイタリアに伝播し、ジェンソンなどによってローマン体が研究され活用されます。さらにヴェネツィアのアルド・マヌーツィオはローマン体の充実、イタリック体の考案、小型本の製作など、イタリア・ルネサンス期に、活版印刷を大きく飛躍させます。15世紀から16世紀の活版印刷の隆盛とともに、ローマン体活字はヨーロッパの多くの印刷人により様々に形成されました。

中世からルネサンスへと推移する中で、本文書体はゴシック体からローマン体へとその主役は入れ替わりま

す。しかし印刷の進展は思ったよりも緩やかで、1500年代半ばでも本文がゴシック体の本を見ることができません。書体だけでなく、組版様式においても、ノンブルやキーワードの処理などを含めそのような印象を抱かせます。

同質の情報を大量に流布させることができるメディアの誕生を支えた印刷技術者の奔放な躍動感を、ゼッケル文庫の中に見ることができます。本文書体としてのゴシック体、ローマン体をはじめ、イタリック体、リガチュア、約物、プリンター・フラワーなど、魅力を秘めた活字の宝庫としてのゼッケル文庫を今後も丁寧調査して、情報を届けることができるようにしたいと思います。

本報告書を作成するに当たり、小川知幸氏(東北大学総合学術博物館助教)に多くの御教示を賜りましたことを記して感謝します。

(ただの としひろ, 附属図書館協力研究員)

*以下の資料は著者の調査メモです。書誌学の書式に基づいた表記ではありません。

特に表記の無い数字の単位はmmです。

資料1【ゼッケルVI, D2-4 105】

大扉, コロフォンにあたるものが無く、「目録カードの年代による1502年の作と2007年7月2日に決定された」旨の付箋が挟まっている。

判型	横 282 × 縦 395	
組版	1段 90 × 2段組 段空き 13	
	第1構成	第2構成
天	39	38
地	55	53
のど	33	30
小口	52	57

小口空きを計ると地が57, 天が54というように、版が紙の垂線に対して曲がっておかれている。その他の頁を見ても、天と地の数値が1~2mmの範囲でばらつきがある。

この本は4つの部分から構成されている。第1構成は目次なので第2構成と一つのものと考え、3冊の本を合本したと考えることもできるが、もともと4部構成の本であると思える。オリジナルなのか途中で合本製本されたかの判断は困難である。現在の工業規格にのっとった製品とは違い、寸分違わぬ作り方ではない。手作り製品の許容範囲ということで何の不都合も感じない本である。

・第1構成(目次)

扉として、テキストツール体でダイヤモンドに組版してある(墨1色)。

本文:見出し書体:テキストツール体

本文書体:ロトンダ体

天:2段組みのそれぞれの段の上に見出しアルファベット

奇数頁(見開きの右側の頁)の小口側にノンブル 例)folio i, ii, iii . . .

レクト(RECTO 1シート1番号スタイル)。

地:奇数頁小口側に折記号番号iからivが振られている

20行法:77

刷色:墨1色

・第2構成(本文)

扉にテキストツール体でスクエアに組んである。朱刷。

見出し本文共にロトンダ体。

見出し, 改行マーク, キーワードが朱刷, 他は墨。2色刷。

天:キーワードを朱刷

奇数頁小口側にギリシア数字でノンブル。墨刷。レクト。

地:奇数頁小口側におり記号番号が振られている。iからiv。

20行法:77

刷色:2色

独特の見出し装飾文字を使用している。

・第3構成(本文2)

基本第2構成に同じ。

天:段間上にキーワードひとつ。小口側にノンブル。レクト。朱刷。

地:折り記号番号i~v

20行法:77

地の空きが, ノド63, 小口70と, 一目で版が曲がっておかれていることが分かる。

・第4構成

基本第2構成に同じ

天:無し

地:奇数頁小口側に折り記号番号iからv

20 行法 : 77

*小口側に3か所耳がついている。素材は皮か。

資料2【ゼッケル VI, D 2-1 63】

CI, D 2-1 63

Rembolt, B. *Vocabularius utriusque iuris*. Par 1514

規格 100 (Y) × 157 (T)

版面 35 (Y) × 119 (T) × 2C

版面比率 53%

余白 のど 12

天 14

小口 14

地 23

左頁 天 中央柱

地 無し

右頁 天 中央柱 小口側ノンプル。レクト。

地 小口側 折り丁記号

20 行法 本文 50

前付 64

概要 16 頁 1 丁折

大扉に B.REMBOLT (Berthold Rembolt) のプリンターマーク

注

- 1 雄松堂広報誌 Net Pinus 57 号
- 2 戸叶勝也『ヨーロッパの出版文化史』(朗文堂 2004) pp.49,54,56-57,73.
- 3 デイヴィッド・ハリス『The ART of Calligraphy もっと知りたいカリグラフィー』(雄鶏社 1997) p.63
- 4 Updike, Daniel Berkeley, *Printing types, their history, forms, and use; a study in survivals*, Cambridge, 1922

参考文献

- 小川知幸「ゼッケルとその蔵書—ゼッケル文庫目録作成にあたって—」(東北大学附属図書館研究年報 31, 32 別冊 1999)
- ジョン・カーター『西洋書誌学入門』(図書出版社 1994)
- 高野彰『洋書の話』(丸善株式会社 1991)
- スタンナイト, 高宮利行訳『西洋書体の歴史—古典時代からルネサンスへ—』(慶應義塾大学出版会 2001)